



空間 NPO 会報

第58号
2017年7月

発行 特定非営利活動法人 女の空間NPO
〒153-0061 東京都目黒区中目黒1-4-18-401
TEL&FAX 03-3711-5054
発行人 長沖暁子

office@space-for-women.org
http://www.space-for-women.org

定例会

- 8月6日(日)13時半～16時
 - 9月10日(日)13時半～16時
 - 10月1日(日)13時半～16時
- * 日時が変更となることもありますので、ご出席の方は直前にお確かめください。

おしゃべり会



- 7月23日(日)13時半～16時
「女性監督の映画を観て
話そう PartIII」
- 8月 (休会)
- 9月18日(月)13時半～16時
「卵子提供-
最近の話題から考える」
話し手：長沖暁子
- 10月9日(月)13時半～16時
「成年後見制度から考える
～私たちが欲しい支援 PartIII」
担当：長沖、丸山

女の空間カフェ



第2&第4 月曜日 14時～21時

- 7月10日、24日
- 8月14日、28日
- 9月11日、25日
- 10月9日、23日

* すべての会場は、女の空間NPO事務所です。

* 予約は必要ありませんが、初めていらっしゃる方はメールでご連絡願います。

office@space-for-women.org

* 詳細は最終ページ、またはwebサイトをご参照ください。

http://www.space-for-women.org

沖縄の遺言

秋谷 楓

今年の3月末、初めて沖縄へ行った。日中の日差しは強くても、朝晩や日陰は涼しいくらいの快適な季節だった。那覇空港に着いてすぐ、レンタカーでひめゆり平和祈念資料館へ。生存者の書き残された証言を読みながら、ガンマ(洞窟)の情景などを思い浮かべ、その悲慘さを五感で体感した。ひめゆり(「おとひめ」と「しらゆり」という校友会誌の名前からとられた)の十代の生徒たちと先生たちが、陸軍病院に動員された240名中136名が亡くなったのだが、そのうち、1945年6月18日に「解散命令」が出された後に100名以上も亡くなった—この事実を知りとてもショックだった。突然戦場に放り出された学徒たちの戸惑いは、いかばかりだったか。ひめゆりの他にも、もっと多くの男子高校生たちが動員されていたことも知った。そして沖縄県民約12万人が亡くなった—。沖縄に玉砕の犠牲を強いて、見放したという事実は、日本人として記憶しておかなければいけないことのひとつであると思う。

翌日の午後、辺野古へ向かう。那覇の市街地をぬけると高速道路は空いていた。辺野古に近づくと数台のパトカーを見かける。毎日巡回しているのだろうか。キャンプシュワブのゲート前近くに来ると、どこからともなく現われてゆっくりと歩いて行くおばあたちの後ろ姿が見えた。3時になると毎日こうして人々が集まる。通り過ぎる車にプラカードをかざす人の列ができる。海岸にある基地建設反対派の拠点へ回った。テントの前に広がる辺野古の海は穏やかで、静かで、ゆったりとしていた。海の色は深みどりで、生きものたちの天国だということを感じさせる。テントの方からカメラのついた三脚を持った人を含む3人の男性が歩いてきた。報道関係者だったのかもしれない。関東の出身で沖縄に住み着いたという女性からいろいろと基地問題について話をお聞きすることができた。どんなにこの自然が破壊されるのかと胸が痛む。それにしても実際は「普天間の飛行場を移設するだけ」などというのは違って、実は水深の深いこの大浦湾に空母や強襲揚陸艦の入る軍港を造り、巨大な基地を作る予定は1960年代に計画されていたとのこと。しかも

(2ページ目に続く)

(1 ページ目の続き) 今回は日本の税金で造られようとしている。耐用年数 200 年間という基地に、巨大になった分跳ね上がる維持費を食われながらずっと海を占有され続けられるのだ。たとえ普天間の飛行場がなくなっても、沖縄の負担は軽減されるどころかますます重くなるだろう。私たちは、また、まだ沖縄に犠牲を強いるのだろうか。

今年の沖縄慰霊の日。追悼式で高3の上原愛音さんの詩(平和の詩「誓い」)を聞きながら涙した。彼女がしっかりとおばあたちの命のバトンを受け継いでいこうとしているように、私たちも6月12日に亡くなった元沖縄県知事太田昌秀さんの思いとともに沖縄の遺言を受け継がなければならない。

7月2日、都議会議員選挙で自民党が歴史的な敗北をした。国政でも、利権を守る人を排し、沖縄を守り、平和を守る人々を応援しようと思う今年の夏である。

おしゃべり会報告

2017年5月21日(日)

「女性監督の作品を観て話そう Part II」

10年前に公開された全編海外ロケの日本映画。好きな役者ばかり勢揃いだったので、わたしは劇場でも見だし、何度も繰り返し観た作品だった。今回も飽きることなく見られたのは、作品に普遍性があるのももちろんのことだが、自分の感性も変わっていないのだと思うと、ちょっと嬉しい。

調理する場面や食材を扱ったり食べるシーンが印象的だなあと、当時も思ったものだが、改めてスタッフを確認してみたら「フードコーディネーター：飯島奈美」とあり、なるほど合点がいった。

そういえば、女性監督の作品でも肌に合わないものはあるけれど、この作品を初めて観たとき、原作・監督・脚本が全て女性というところに先入観があったわけでもないのに、無駄にざわつかずにいられたなあ・・・と改めて感じた。その感覚が裏切られることはなかった。(みっち)

暮れのある日、肩から背中、胸といきなり発疹が出た。何だ！何だ？あわてて日曜日もやっている皮膚科に駆け込んだ。その帰途、偶然小さなパン屋さんを見つけた。その名も「かもめベーグル」。ベーグルもおいしいが、私のお気に入りには、ドライフル

ーツをた

っぷり練り込んだ黒パンにクリームチーズを挟んだ一品。半年たった今は、パン屋さんに行くついでに皮膚科に通っているようなもの。

おいしい物が登場する映画は楽しい。そして傍目にもおいしそうに食べられたらいいなあ。もたいまさこがおにぎりを食べる姿はすてきだった。(礼子)

「フィンランドへ行ってみよう」

誰しもどこかの国に特別な思いがあるとは思わないけれど、私にとってはフィンランド。40年前、旅費がなく、当地での体育の国際会議で日舞やダンスを披露できなかった。参加しなかった学生はクラスで3人だけという苦い思い出。映画ではシャイな国民性に親しみを覚えた。何気ない日常にあるファンタジーなできごとが北欧のイメージにぴったりと合う。テロは似合わないよね。新宿でデートした時買ったお気に入りのカップが、社会人になって数年後に割れたときから、ずっとあのフィンランド製を探している。甘酸っぱい思い出。片桐ハイリさんがいるだけで見ていて心やすらぐ。最初から最後までさわやかな風の中に私も漂っている感じ。ヘルシンキではあの食堂を訪ねよう。(K. A.)



2017年6月25日(日)

「成年後見制度から考える、私たちが欲しい支援 part II」

丸山則子・長沖暁子

梅雨に入り雨模様の日のおしゃべり会となりましたが、すぐにワイワイと話しました。最初に、ある法人後見人についての事例が話されました。受任に至る調査書類と現場に違いがあることが後見人を受けた後で出てきたケースでした。親族との間で、「いままで自分たちが世話をしてきたのに」、「今まで自分たちが金銭管理をしてきたのに取り上げられるのか」など、裁判所が決めた後見人が生活、財産管理に関わることを「なぜ」するのかという疑問や不満が出てくることはよくあるようです。それら一つひとつ丁寧に説明し理解してもらう労力が必要になります。また、地域で生活支援委員をしている参加者から、ご本人の話聞くことを大切にしている、専門職にワークシートと共に口頭で変化や気になったことなどを報告するという話ができました。

この日のメインは、参加者のそれぞれが、自分がして欲しいこと、望むこと、できないかと考えていることを書き出し、並べてみました。それを分けてみるとこんな感じになりました。

<情報> 高齢者の施設のリスト(中に居酒屋があるといい)。活動的な明るい施設を選ぶには? マンガ本の宅配。私好みのエンタメ情報(その時々、旬の)を発信してくれる人とツール。自分の住んでいる処の資源を知る。

<人の手、ネコの手> 緊急時(病気など)のヘルプ。保証人制度をなくすために共に戦ってくれる人。保証人制度を倒すまでに入院することになった場合“名前”を書かせてくれる人。かんたん弁護士かそれにかわるもの。もしもの時

にネコを指定した引き取り手に渡してほしい。もしもの時にPC/スマホのDataを消してほしい(処分方法と費用を預けておきます)。入院した時、着替えやお金を持ってきてくれる人。<組織>入院等の保証人が親族以外に簡単にたのめる会。夫婦別姓の推進の会。女の空間あちこちに。個人にたのむのは…組織の方がたのみやすいかな。財産は女の空間へ、物は全部処分してOK。

<アンチ施設> 地域で生きたい。できる限り自宅でいたいと思う自分。父は最期まで自宅にいたいと言っていますが…。自宅で生活を続けたい最後まで。いやだと私が言ってもいろんな人が来るように! もしもの時に、正確に周囲の人へメッセージを伝えてくれる人。病気になっても、歳をとっても、隔離しないでほしい(いろんな人にあえること)。出入り自由の部屋にしたい。

<外出> 月に二回ぐらいランチを共にしてほしい。一緒に食事に行ってくれる人(焼肉とかおすし、タイ料理など)。将来、施設に入った時、一緒に外にごはん食べに行ってくれる人。施設でごはんを一緒に食べてくれる人。外につれだしてくれ。外出するところがある。自由に出かけたい。

まとめると、私たちが欲しいものは「情報」と自分だけではできないことを手助けしてくれる「他者の手や組織」、そして施設に入るか入らないかは別として生きている場での「自由/人との交流」あたりになりそうです。

次回は10月9日に開催します。項目をどんどん追加して書き加え、その内容を検討したいと思います。そして「私が欲しい支援」をどんな形で実現できるか、行動に起こせることは具体化することをめざします。初めての参加でも大丈夫です。おしゃべりしましょう。(ノリコ)

☆☆ 女だけのシェアハウスに伺ってきました ☆☆

私の友人奥山たえこさんからメールが届いた。

「シェアハウスを始めます。」だって! そりゃ、ち

よっと見てみたい。5月の終末、千葉県柏市のあさひシェアハウスに伺った。

彼女との出会いは1998年。当時私は、ひとり暮らしの女性の住宅問題を調査していて、インタビューをさせていただける方の募集を『ふえみん』に出したところ、応募してきてくれた一人が彼女だった。私は杉並区内のプロ無、古い、狭い（ごめんなさい）でも駅に近くてロケーションは最高な彼女のアパートを訪れ、話がはずんで、何と初対面なのに泊まってきてしまったのだった。

その後、たぶん古い建物だから取り壊しになって、近くに引っ越したのかと勝手に思っていたら、住所はその時のまま。久しぶりに会って、「引っ越さないの？」と尋ねると、彼女はあの時と変わらぬ穏やかな笑顔で「あそこでじゅうぶん」。足るを知る人であった。

それよりも、住まいの確保もままならない女性やひとり暮らしでは不安を感じている女性に、安心して暮らせる場を提供したいという志から、今回のシェアハウス開設に至ったという。

訪れて驚いたのは、こんなまだ新しい家が空き家になるという現実だった。とてもきれい。贅沢な造りだ。ここに住む人がいないなんて、これこそ資源の無駄だと思った。不足しているのは、そういう使われていない資源と、必要な人との間を接続する人（または法人）だと思う。彼女はその役を自ら買って出た。

私にできることはないか？会報の場を借りてお知らせすることから始めよう。（木下礼子）

高齢者こそ、何かと安心なシェアハウスを

私は、東京都杉並区で、12年間区議会議員（緑の党）をしていました。2年前に落選後、自分のミッション（＝貧困問題、女性問題）への取り組みを実現したいと模索してきました。特に高齢単身女性の住宅確保の困難さは、上京以来ずっと、そしていまでも賃貸暮らしをしている、今年選歴になった私にとっても、まさに個人的テーマでもあ

ります。

その実践として、この5月から千葉県柏駅徒歩7分の住宅街に、私が一軒家を借りて、女性向け（高齢者、収入の不安定な人、子ども連れ歓迎）シェアハウスを開設しました。大変きれいで、贅沢な作りの2階建てです。部屋を3畳程度（押入れあり。2.6万円～）と狭くすることで、家賃を低く抑えました（2.6畳で月額2万円～＋別途管理光熱費1万円～）。個室は狭くとも共用のダイニング、リビングはゆったりしています。2階にも共用スペースを設けました。

<http://www.jca.apc.org/~okuyama/sharehouse/>

施設ではないのでほかの入居者が介護をすることはありませんが、お風呂での事故などを考えると、同居人がいることの安心は、如何ほどかと思えます。なお介護保険を使うようになったら、ヘルパーが出入りできるようにします。

柏駅（JR常磐線・東武野田線 上野駅まで30分。品川直通もあり）は、高島屋や、ドンキホーテなど、お買い物も便利にぎやかな街です。駅から20分ほど行くと、自然もあります。

契約は、一ヶ月～で、長期も可能です。（ごく短期の方はご相談下さい。）もちろん住替えの間や、上京しての仕事探し、アパート探しの間など、何なりと使えます。

この記事をご覧になった方が、お知り合いに「住まいに困ったら、『柏あさひハウス』があるよ」と、お伝え下されば、助かります。ご自身のSNSなどで、広報して下さったらとても嬉しいです。

お問い合わせは、どんなことでも、お気軽にお願いします。（奥山たえこ）

連絡先 166-0003 杉並区高円寺南3-6 2-10
小鈴荘（不在がち）tel&fax：03-3315-2155（不在がち）／090-9147-8383

e-mail：okuyama@jca.apc.org

<http://www.jca.apc.org/~okuyama/@okuyamataeko>

~~~~~



会員の方が出された本2冊をご紹介します。どちらも女にとって意味のある仕事です。ぜひお読みください。

ふえみん聞き書き集

# 「めげない女たちの物語」

逆風の吹く今こそ、読んでほしい。勇気と元気をもらえる一冊です。



『ふえみん聞き書き集

めげない女たちの物語—戦後70年、歩み続けて』

ふえみん婦人民主クラブ発行

262ページ 1冊 1500円(税込)

送料：1冊につき200円(5冊以上は送料不要)

ご注文はふえみん婦人民主クラブへ(書店では取り扱っていません)

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 TEL 03(3402)3244

ふえみん婦人民主クラブ

●ふえみん婦人民主クラブの創立70周年(2016年)を記念して取り組まれた「ふえみん聞き書きプロジェクト」を一冊にまとめた本。本書に登場するのは、山形から岡山までの70代から90代までの会員21人。多くは戦時下に教育をうけ、空襲を生き延び、戦後民主主義に心躍らせ、婦人民主新聞と出会いました。子ども時代の話や、心の傷が深く長い間話せなかったこと、婦人民主クラブの今につながる運動や出来事が語られます。

●「ひとりの話は個人の運命だが、100人の話は歴史になる」とは、ペラルーシのノーベル賞作家アレクシェービッチさんの言葉(2016.11.26付け東京新聞)です。この21人の物語から、婦人民主クラブの歴史にとどまらず、日本の女性の戦中・戦後史の一端を実感してください。

\*\*\*\*\*

## 文科省/高校「妊活」教材の嘘

### 妊娠・出産に関するウソの構造

2015年8月、文科省は少子化対策を盛り込んだ高校保健体育の教材『健康な生活を送るために』を発行したが、そのなかの「妊娠のしやすさと年齢」グラフは改ざんされたものだった!

西山千恵子・柘植あづみ 編著

定価：本体1800円+税

(四六判・並製、264頁)

ISBN 978-4-8460-1626-5

論創社

- 序章 高校保健・副教材事件とは何か
- 第1章 グラフを見たら疑え——「専門家」が誘導する非科学
- 第2章 「高校生にウソを教えるな!」集会と「専門家」たちへの質問状
- 第3章 「子ども=生きがい」言説の危うさ
- 第4章 「卵子の老化」騒ぎと選択——考えるために必要な情報を
- 第5章 隠蔽される差別と、セクシュアル・マイノリティの名ばかりの可視化
- 第6章 日本人は妊娠・出産の知識レベルが低いのか?
- 第7章 人口政策の連続と非連続——リプロダクティブ・ヘルス/ライツの不在
- 第8章 「結婚支援」と少子化対策——露骨な人口増加政策はいかにして現れるか
- 終章 日本の人口政策を世界の流れから見る
- コラム 捏造・改ざんを遠ざけるために

西山千恵子  
高橋さきの  
西山千恵子  
鈴木 良子  
柘植あづみ  
大塚 健祐  
田中 重人  
大橋由香子  
皆川満寿美  
柘植あづみ  
三上かおり

